

「内科レジデントマニュアル」第5版

聖路加国際病院内科レジデント 編集

熊本大学医学部附属病院総合診療部

谷 口 純 一

毎年春になると新しい研修医がやってくるのであるが、彼ら・彼女らに接すると自分が研修医のころが思い出され、様々な気持ちが沸き起こってくる。必ずしも上級医がいつもバックアップしてくれるとは限らず、特に患者が急変・重症化したときこそそばにいなかったことが多かったかもしれない。別に“マーフィーの法則”などではなく、今思い返してみれば、ただ単に急変・重症化の早期サインを見落としていたり、予測が不十分であったり、また自分があわてていて連絡が後手に回っていただけということが多かったのではないかと、情けなくも恥ずかしい状況であったと思う。

そんなとき、そんな自分を一番現実的に助けてくれたのは、「内科レジデントマニュアル」であり、「ワシントン・マニュアル」であった。今回「内科レジデントマニュアル」が第5版に改訂されるにあたり、自分が研修医のころに使っていた旧第2版を久しぶりに引っ張り出し、比較してみた。たいへん驚いたことは、ベーシックでスタンダードな部分は何

ら変わっていないこと、その一方で、そのほかの所は大幅に進化しており、新しい項目や知見も加わり、より実際になっていることである。研修医のときたいへん世話になり役に立ったが、今の自分にとっても参考になる所が多々ある。

自分もやがて上級医となり、研修医向けの簡単なマニュアルを作ることにも経験したが、非常に大変な作業であったのを記憶している。“マニュアルを作る場合、①分解、②急所の明確化、③理解、④例解、⑤図解、⑥改訂の時期の明示と改訂責任者名の明記などがポイントであり、そして、マニュアルというものは高度知識社会での基盤的道具であり、それに従い、知識を身につけた上で、それを越えた自分の仕事を創造することができる。”という文章を最近読んだが、「内科レジデントマニュアル」はまさにそのようなポイントをふまえて作成されており、主として内科の救急的諸問題に対し、“基盤的道具”としてはもちろん、より高次の医療を実現することが可能なポテンシャルを持った“武器”である

と改めて再認識させられた。そもそも本書は日本の「ワシントン・マニュアル」を目指して作られ始めたこと聞いたことがあるが、「ワシントン・マニュアル」が救急の現場や、日本の医療状況に必ずしもそぐわない面もあり、特に救急の現場の研修医には使いにくい場合もあるように思われる中で、本書は日本の研修医にとって最も重要なマニュアルであると言えるだろう。自戒の意も込め、一人でも多くの研修医が、このマニュアルに触れ、活用し、そしてマスターしたうえで、これを超えるより高次で、国際的な医療を展開していつてくれることを切に希望してやまない。

また、不断の努力で非常に優れたものを作りあげていった聖路加国際病院内科の新・旧のレジデント諸兄に敬意を表するとともに、今後もより効果的でユニークで正確なものを継続して作って頂きたいと願う。

●B6変型 頁396 図16 2000
定価(本体3,300円+税) 送料実費

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)